

KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

地形と差別：差別意識解消のための視点

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 関西外国語大学 公開日: 2016-09-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 浅野, 浅春 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学
URL	https://kansai.gaidai.repo.nii.ac.jp/records/5753

地形と差別

—差別意識解消のための視点—

浅野 浅春

I はじめに

私は「季刊大林」20号・昭和60年（1985）を読む機会があった。そこには、(株)大林組が大仙陵古墳（仁徳天皇陵）を古代工法で築くにはいかほどの日数や費用が必要かを試算した論文が掲載されていた。それによると、工期は15年8ヵ月、必要な作業員数は延べ650万7千人（埴輪の窯人の動員数は含まない）、総工費は796億円とある。仁徳天皇の埴輪の数は1万5千本と言われている。このためにも多くの人を必要としたはずである。すなわち、窯のための薪を集め、土を用意し、練り、固め、焼くということを考えると、単なる人数合せではなく、その能力を持った人を必要としたのである。これを合わせると、どれほどの規模になったであろう。しかも、百舌古墳群だけでも100基を超えろといわれる。

この論文は、私に新たな視点をもたらした。とても簡単で、基本的なことである。「だれが、それをなしたか」、ということである。

古代、大陸から多くの人が難波津に船を着けた。誰が船を操って来たのか。小舟に乗り換え、川を遡上し、あるいは陸路に変えて倭に入り、都にまで達した。倭からその逆に大陸に向かった。どういう人達が支えたのか。その道中の食事は誰が賄ったのか。

弥生時代中期に生まれた多くの小国が戦いを繰り返して、地方豪族となり、それらが統一されて連合政権の形をとるまでの古代戦国時代、それを支え、また、戦ったのは誰なのか。誰が馬を引き、御したのか。

この自身への問いかけは、邪馬台国以前の時代から、大和朝廷がつくられ、・・・武士が権力を持ち、中世戦国時代を経て、豊臣、そして徳川時代から明治維新、・・・今日の全時代にわたって続いている。そして、自答の

ための基礎に、別の自問がある。それは「ひとは変化し続ける自然と、いかに関わり、いかに巧くやろうとしてきたか」である。また、「変化し続ける社会形態のなかで、ひとはいかに生きてきたのか」である。この論文での問題提起は、差別されてきた、あるいはされているひとの生きざまに対する視点についてである。彼らの生活を正しい自然観と歴史観で考えることが大切である。今日という時代は、長い連続する時の流れの中の一瞬に過ぎないのである。その一瞬での事例を持って、すべてとするとところに過ちが生ずる。

Ⅱ 水の制御の専門家

例をあげて考える。兵庫でも奈良でも和歌山でも大阪でも、川沿いに多くの集落がある。川が曲流するところや合流する辺りの堤は一段と高くなっている。近代に人工的に高くしたのである。いくつかのところには、下水処理場がある。

ものの本には、次のように書いてある。「河川の流域で氾濫の起こりやすいところや中洲には被差別部落があって、住人は氾濫が起こるたびに家財を持って避難を余儀なくされた」と。これは本当であろうか。また、いつのことであろうか。筆者は次のようにも考える。彼らはその川の上流での天候を推察し、雨量の推移と水嵩^{かさ}を観察し、いざというときには、堰を切って水を逃がし、遊水池と川水が運んできた栄養豊かな土砂で、地味回復の田畑地を作る役割を担っていたのではないのか、あるいはそのように出来るようになったのではないかと。いまは、今日的知恵の下、行政によって、下水処理場がつくられ、この人たちにその役割はなく、別の能力を出して生きていくことを余儀なくされた。

この観点は、「人間を生存可能にする原点は水にあり、定住の条件は水の制御にある。権力者・支配者がその地位を安泰にするためには、それができる人たちを支配しなくてはならない」という基本の確認からのものである。

また、古墳時代、古墳の造成地はどこに、そのための石や土砂はどこから取ってどのように運ぶか、を決定できる地形・地質・岩石などに関する専門能力を持つ人たちや、窯人や石工などの技術者が存在しなければならない。

ここでも石や水の利用と制御についての能力を持つ人たちが存在し、支配されていたとの確認をしておきたい。

Ⅲ 地形の変遷を学ぶ

(1) 大阪平野周辺の変遷とその間の人や動物の移動

- ① 最終氷期約2万年前、海面は130mも低下し、瀬戸内海は陸化していた。当然、シベリア-樺太-北海道-本州-四国-九州-朝鮮半島が陸続きとなり、北からマンモス象が南からナウマン象が往来し、北のシベリアから、南の中国・朝鮮半島から人々が往来することが出来た。
- ② 縄文時代6000年前、海進の最高頂期、海面は現在より約2m高くなった。現在の大阪平野は海域となっており、マッコウクジラが泳いでいた。高槻・枚方付近は淀川の広い河口で砂州が発達し、大和川は南東から河内湾に分流して注ぎ込み、小さな自然堤防や三角州をつくっていた。上町台地は半島状に海に突き出し、河内湾と大阪湾を隔てていた(図1)。
- ③ 縄文時代後期約3500年前から晩期3000年前、かつての河内湾淀川・大和川によって運ばれた土砂で埋積され、小さくなった。

また、上町台地先端の砂嘴がのび、水域がさらに閉ざされ、それとともに海水と淡水が混じり合う汽水の湖に変っていった。

現在の森ノ宮付近から、マガキの貝塚が発掘され(森ノ宮遺跡)、宮ノ下では、ヒトの足跡(宮ノ下遺跡)が確認されている(図2)。

時代区分		年 前
現 代		100年前
近 代		
近 世		
中世	室 町	700年前
	鎌 倉	
古代	平 安	1000年前
	奈 良	
古墳時代	飛 鳥	1400年前
	後 期	
	中 期	
弥生時代	前 期	1700年前
	後 期	
	中 期	
縄文時代	前 期	2000年前 2300年前 3000年前 4000年前 5000年前 6000年前
	後 期	
	中 期	
	早 期	
	草創期	
旧石器時代	後 期	1万年前
	中 期	1.2万年前
	前 期	3.5万年前 8万年前

地形と差別

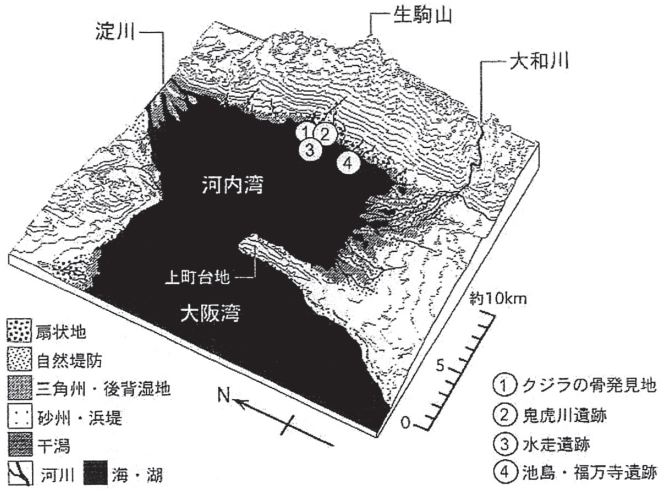


図1 縄文海進高海水準期（五千数百年前）の河内湾（松田・別所原図）

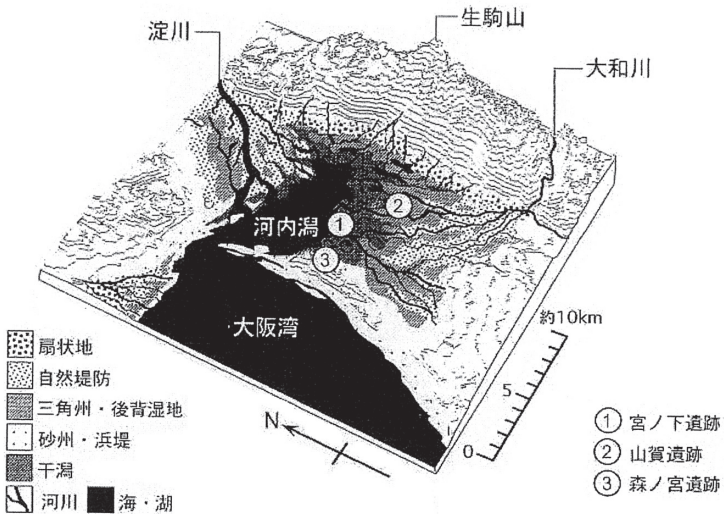


図2 縄文時代後期（約3500年前）から晩期（約3000年前）に発達した河内湾（松田・別所原図）

- ④ 弥生時代中期約2000年前、縄文時代の晩期に湖水準低下で上町台地先端の砂嘴はさらにのびて、河内の水域はほとんど閉ざされて淡水域になった。縄文時代の晩期から弥生時代には、再び湖面が上昇して水域が広がった。湖の静水域に向かって、淀川や大和川の自然堤防地帯が拡大していった。湿地での稲作が始まり（高井田・志紀遺跡）、堤防上には集落があった（瓜生堂遺跡）。そして、セタシジミの貝塚（森ノ宮遺跡）も確認されている。

また、1700年前の古墳時代の始まりの頃には、水路管理の進んだ水田があり、堀江の開削があったことが確認されている。

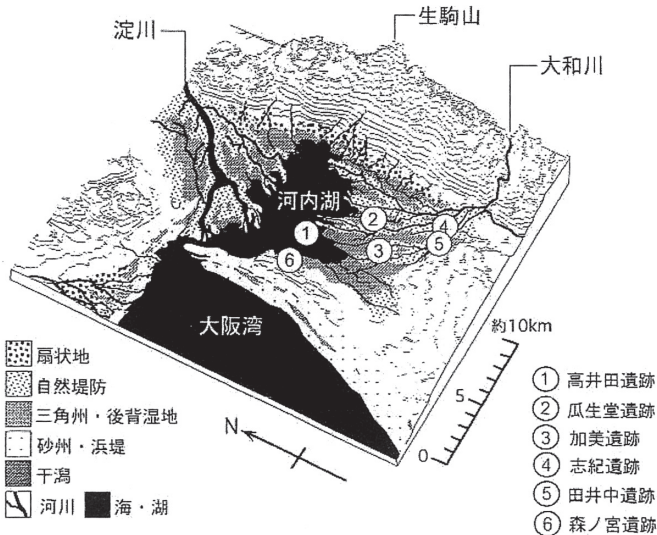


図3 弥生時代中期（約2000年前）の河内湖（松田・別所原図）

(2) 大陸から日本への人の移動

約2300年前、弥生時代の初め、中国では秦の始皇帝の軍が多くの国を破り、強大な秦帝国をつくり上げた。この始皇帝から逃れようと小国の王は国土の民を引き連れて移住する。越南（ベトナム）や雲南、四川、朝鮮半島、そして、日本へと。

山口県下関の土井ヶ浜遺跡の人骨約350体の身長は、成人男子1.64m、女子1.61mであり、頭骨は高く幅が狭いという特徴がある。さらに、炭素法による年代測定によると、それらが2200年前から2000年前のものである、との調査報告から、これらが、始皇帝から逃れてきた民ではないかと考えられている。

この時期、朝鮮半島を経て日本に渡来した人々の数は10万人を越すとの説もある。彼らは、稲作技術、水の制御、青銅器鑄造技術等の技術を日本に持ち込み、当時の日本を一変させたに違いない。

(3) 人々の移動と地形

人々は、古代からさまざまな目的で移動した。海路を、陸路を、河川路を、文化交流のため、貿易のため、戦いのため、あるいは新しい居住地域を求めての移動である。その過程で、それぞれの場所で、例えば、海や河川の船着場（港）では、その村や町の住民と交流し、馬や船を調達し、それを操る人に助けられ、食物を供給され、宿を借りる等の交流ができた。時代によって、支配者と奴隷の関係であったり、殿と家来の関係であったり、旅人（客）と商人（宿・馬借・船頭）であったりとするわけだが、移動（旅）を安全に行うためには、要所に海・河川・土木・気候変化・馬・食・衣等に精通し、知識や能力、物を供給できる人々の存在が必要であった。そのような人たちがいて、村・町が発展した。

古代、難波津に船で到着した人たちは、高津・猪飼津・桑津といった津を利用しながら、河内潟を流れる河川を遡上して大和に達したはずである。現在の河内平野の地名、菱江、盾津、若江、豊浦、日下江などは、このような人々が住むことによって村・町として発展し、今日に至っているのである。

(4) 古墳時代～古代の奈良盆地

河内潟から河川（大和川）を遡上し、奈良盆地の西端、安堵、河合・三宅に至る。高度の低いところではあるが、河内潟の陸域の高度と比べると、こちらのほうが高い。このことは、河内より居住域が多いことを意味する。

河川はここから、北に東に南にと、毛細管の血脈が広がるようにして盆地をとりまく山にあるそれぞれの水源につながっている。

逆をたどれば四方の山々を水源とする河川が、北・東・南から集まって河合あたりで一束（大和川）となる。これらの河川水を制御できれば豊かな生活が保障される。ここに至るまでの、それぞれの河川の曲流するところに制御する能力のある人たちが定住し、あるいはさせられていた。それらの近辺に、現在、豊かな建造物が残り、あるいは遺跡が存在する。法隆寺が安堵にあり、三宅には島根山古墳（大量の碧玉製の腕飾りが見つかった）がある。

IV 上町台地からの学び

筆者は大ビルディングが林立する都市を歴史科学・環境科学の視点からとらえようとしてきた。露頭を直接見ることができない都市を教材とした理由は、多くの人間が生活している都市の自然環境や成り立ちの歴史を知り、人間と自然との関わりを考え、人間にとって、よりよく生きることの追究ができると考えたからである。具体的には、上町台地を巡検し、さらに地下鉄道や地下街などの人工の生活空間の地質断面図を作成した。その結果、自らの時間的・空間的位置について認識し、生活環境と自然への合理的な働きかけについて考えることができた。

しかし、上町台地を巡検するということは、いろいろな人々の生活の場に足を踏み入れていることになる。あるところでは、屋根の上からのぞき、あるところでは玄関先を無遠慮に右往左往するということになった。以下に上町台地巡検の概要を記し、地形が差別をつくる要因になり、行政がそれを助長する例を記す。

(1) 上町台地の地形と地質

大阪市内の中心部がある上町台地は、大阪平野を東西に二分するように南北に縦長く半島状にのびている。南北方向の長さは約10km、東西方向の長さは約2 kmである。標高は、北端の大阪城付近で23m、南に向かって低くなっている。また、台地の西斜面は10m～15mの比高をもつ急崖となっているが、東斜面はゆるやかな傾斜となっている。

台地の地質は、大阪層群（約260万年前～約38万年前）の上に段丘層（上町層）が不整合関係で堆積している。台地の周辺は完新世（約1万年前から

現代)の砂礫層や粘土層(難波累層)が分布しているが、台地の西には縄文海進時の海岸の砂堆と推定される砂層が分布している。この海進時には外海に面した西斜面は浸食されて海食崖を形成し、東斜面は半島に抱かれた内海の崖であったと思われる。また、台地の西側に位置する地下内部には南北に走向をもつ断層があり、それと関わる地層の褶曲構造が台地の地形に反映している。

(2) 巡検コースの概要

台地上の西端の比高10m余の急斜面にある道や階段を上り下りしながら、そこが波打ち際であった往時のことを想像することができる。また、急崖から落ちる滝や崖の下にある旧名泉井を見ることで地下水とそれを流す地層のことを考えることもできる。また、西から東に台地を歩くことで、傾動地塊のごとく東に次第に低くなっている様子がわかる。そして、東斜面では、縄文海進時に発達したであろう浸食谷の海岸線を想像することができる。

つまり、人工が加えられてきたけれども原地形が残っており、コンクリートで被われ、本来、自然がつくったのだということを忘れられ勝ちな大都会を人間が手を加える以前の状態に戻して考えることができる。

次に、人間がここで社会生活を営むようになり、地名がつけられてきたのであるが、原地形の特徴を表現しているところが多い。夕陽ヶ丘・阿倍野・細工谷・清水谷・松ヶ鼻などがある。大阪は古くから開けた土地で、台地上やその周辺に、古墳や遺跡、塚、歴史的建造物が数多く残されており、地質時代から人間社会の歴史を通して総合的に考察できる格好の材料が揃っている。

(3) 上町台地の谷と丘

上町台地は天然の浸食谷に、人工の掘割谷を加えて多くの谷があり、谷の形成によって残された稜部は、急崖で囲まれた丘として残っている。すなわち、人工の掘割谷の堀越の北側では、東斜面に清水谷・空堀・味原谷・細工谷と宰相山・真田山・桃山があり、南側では、東斜面の大僧谷、西斜面の稲ヶ谷・苦ヶ谷・鯨谷・御坊谷と聖天山・帝塚山などがそれである。

(4) 上町台地の歴史

大都市の中心部としての上町台地が、都市化・住宅化するまでの変遷をたどる。

- ① 難波江に臨む難波埼の要衝として、643年～793年に難波宮が存在。玉造江は河内川流末にあって西風を避ける泊地となり、大陸文化流入の門戸となり、四天王寺・生田魂神社・百済大社などの建立とつながる。のちには、難波津・三津・墨江津などが台地西に海港として、猪甘津（猪飼野）・桑津などが台地東の草香江に臨む大和川水運の河港として栄えた。大陸からの渡来者と津で働く、川や水の理解者が交流することで文化・技術が向上する。
- ② 784年（延暦3）以後の長岡・平安遷都を機に衰退するが、中世前半までは難波津を踏襲した渡辺津がにぎわい、熊野街道筋は門前町ができ、四天王寺・阿倍野・住吉大社が繁栄を支えた。
- ③ 中世末期、度重なる戦禍で台地上は原野化に向かう。
- ④ 1496年、石山御坊が生玉庄に建立されるとともに寺内町が形成され、渡辺津がもつ港津機能と難波埼が果たす城砦機能を背景として発展していく。
- ⑤ 1583年、豊臣秀吉の集城が始まり、同時に堺・平野の商人が移され、城下町経営が進められる。渡辺津を中心にして活躍していた職人集団が強制移転させられ、差別される集団としての生活を余儀なくされる。
- ⑥ 1616年、松平忠明の市街地造り、すなわち、旧三の丸壊平による東船場・玉造の町屋造成・堀川開削による船場・島之内の開発整理・市内分散の寺院・墓地の集団移転、すなわち、城南寺町・生玉寺町・谷町寺町・下寺町などをつくり、墓地は千日・小橋・梅田の3村につくられた。上町寺町は四天王寺や生玉社の立場とも関連し、高台地形を生かした城南防衛線構築を意図したものと伝えられる。
- ⑦ 大阪三郷の町方が成立、上町は北から大阪城と付属の侍屋敷及び寺町がつづき、その間に高津の瓦土取場や野島が点在、町屋の形成は台地の西の段丘崖で、上町侍屋敷と区切るようにして東船場につくられ、その

他に暗越街道筋、玉造稻荷と四天王寺の各門前、住吉大社門前街道筋にとどまっていた。当時、台地上にあった村は、東成郡内に、天王寺、東高津、阿倍野、国分などと、西成郡内の8ヶ村、住吉郡内の各村の計33村であり、商業的農業地帯を形成。

- ⑧ 明治維新以後の上町北部の景観は城地が果たしてきた軍政的性格の近代的継承の形で再構成される。1871（明治4）年の4鎮台8分営制のもとで大阪鎮台本部が城内に設置され、のちに戦役と共に軍設備が拡大し、工都大阪として軍需生産機能が拡充される。
- ⑨ 明治末期、市街化が上町台地全域に波及し、1919（大正8）年、砲兵4連隊の移転を契機として施設の転出と再編を促す。
- ⑩ 1897（明治30）年ごろから台地上に学校群が進出する。また、東高津・桃山を中心とする高級邸宅街の形成と阿倍野・住吉岡への移動。
- ⑪ 明治末から大正初期にかけて、天王寺以北の市街化完了に伴う聖天山・帝塚山方面の邸宅街形成、1925（大正14）年、第2次市域拡張を契機として阿倍野の市街化促進。
- ⑫ 1933（昭和8）年、東西両高津・夕陽丘・天王寺・茶臼山が風致地区に指定。

V 地形を見る一つの視点

（1）上町台地の巡検

現在、上町台地上及び天王寺の北西の崖下の一部を歴史の散歩道として飾り、レンガを敷いて案内している。筆者が巡検コースとしている道も、この散歩道と一致してるところが多い。

都市における環境科学教育の目的の一つはそこから自然本来の姿を探り出すことである。また一つは、その自然と人間が、どう関わって生きてきたかを考えることである。（4）で概観した歴史の流れの中に上町台地の自然が直接・間接に関わっている。また、台地上の高台は自然美と歴史的風致を維持すべく、学校・病院・庭園・別荘の立地を誘発する。一方、低地では、庶民的な長屋街が形成される。長屋街には等間隔で、大衆浴場ができる。

台地西斜面の崖は、その上と下との居住区の人たちの生活を区別するものとして使われ、さらに行政の境（例えば阿倍野区と西成区）として使われる。水平方向の距離でいえば数mでしかないのに、高さに差のあることが人間の生活に差をつくってきた。現在のように下水道や排水設備が備わっていない頃の台地上の高台での生活とその下の谷での生活を思えば両者の違いは明らかである。

本来、谷は水の落ちるところであり、その水を動力として使えるところであったはずである。玉造や細工谷は工作職人の働き場ではなかったか。人口が少なく、都市化していないところでは、支配者が特別の目的を持って特定の人たちを条件の悪いところに住まわせるというようなことがなければ、自ら、浸水するような低地に住む必然性はない。しかし、都市化し人口も増加し、住宅地がより多く必要となれば、広い低地に長屋街ができる。その長屋街にも住めない人たちはどこに居住するのか。崖や谷しかなかったであろう。現在、雨が降り続けば水路になり、浸水する、かつての小川にびとは住居を作って住んでいる。

差別され、生きることに大きなハンディを持った人たちにとっての住居は多くの場合、地形的条件の悪いところとなる。その上に、権力者（現代では大衆も）は行政的に台地上には風致地区を、崖下には例えば旧飛田遊郭（1918年）をつくったりもする。これは行政が地形を利用して差別をつくる例である。

資本主義社会において、人口がある限度を越えると地形が必然的に差別をつくる要因の一つになる。地形に影響された生活は基本的には今日も続いている。

都市での環境科学は谷と尾根との差が、低地と高台との差が、人間の生活の差別をつくるということ、その地形を行政が利用しているということ、そして、台地上には真の太陽と行政の太陽が光を与え、崖下には光が当たらないという現実を明らかにする。比高10mの差が、行政区の境をつくり、その境界の両側の人たちとの壁となっているのである。

今日もこの壁は依然として存在する。しかし、台地上と崖下、尾根と谷の

間の壁だけではなく、台地上や尾根上にも新しい壁が急速にできつつある。その壁をつくっているのは、資本・金であり、荒んだ人の心である。

今日、再開発で大建造物ができ、古い壁は次第に取り壊されていくように思われる。しかし、古い壁がとり壊されても、新しい経済格差の壁が以前にもまして築かれている。

(2) 上町台地の地質断面 (図4)

上町台地の地質断面から、下位の大阪層群 (約260万年前～約38万年前) の上に、天満層や上町層が堆積し、その上にこの1万年以内にかつての水域に堆積した沖積層がのっており、プレートの圧力による褶曲と断層が大阪層群にあることがわかる。

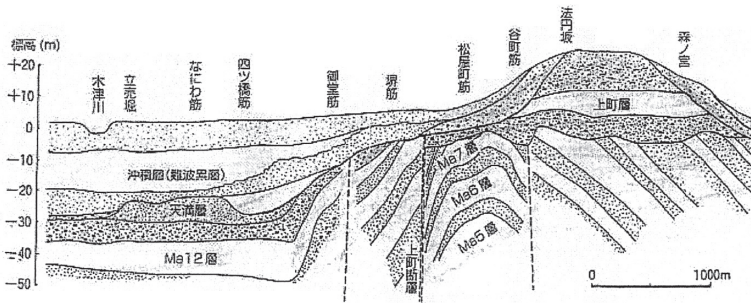


図4 上町台地地質断面図

現在、私たちはこの地下に空間をつくり、地下鉄道を走らせ、地下室のある建物をつくり、地下街をつくって生活している。しかし、多くの人は、その地下空間に対する認識をもってはいない。

低い建物は軟弱で、水分の多い地層 (沖積層) に基礎を置いている。高層の建物は比較的堅固な地層に基礎を置いている。

地下鉄道の電車は地下の20mから10mの深さのところを走っている。人は地表から地下鉄の駅に降りる。10m以上下ることになる。プラットホームのところにある地層が大阪層群の50万年前のものだとすると、地表からプラットホームに降り立つことで、50万年という長い時間間隔を抜けたことになる。

また、地下鉄の、ある駅には上町断層が走っている。ここでは常に漏水がある。人々は日常的にここで生活している。

人々は地下の建造物とその基礎に不安を持ってはいないから、そこで生活できる。大地震が起こればどうなるのだろうか。津波がこのような地下街にまでこないのだろうか。今日、ほとんどの人はこのようなことを考えもしない。多くの人に、大都会のコンクリートジャングルの下には自然の創造物があるという認識がない。今日、自然を理解する専門家と技術者たちによって安全が守られている。いつの時代もその自然の創造物を理解し、それに対応できる具体的能力をもった人たちに助けられ、あるいは、互いの能力を互換し合って生きてきたのだ。

現代の民主国家にあって、為政者は、すべての国民の生命を平等に守る義務を持つ。しかし現実には、経済的格差が、安全を買える人とそうでない人をつくる。

Ⅵ おわりに

古代、中世、近世、現代を通して、差別はあり続ける。しかし、差別のあり様は時代によって異なる。下剋上の時代のように、支配者と被支配者の関係が替わったりした時代もあった。中世のように、差別される側の集団が、創造的で、文化を創り出した時代もあった。

人は一般に、あるひとつの時代の短い時間の中での事象と知見を真なるものとする愚に陥る。それが差別に繋がる。まさに、無知は犯罪的である、といわれる所以である。しかし、これは他人事ではない。まず自らのことである。決して容易なことではないが、まずは、正しい歴史観と自然観の養成が必要である。もっとも、学べる環境にある教員が無知では困る。筆者自らの内なる差別意識解消のための学びは不断でなければならないと戒めている。

参考文献

- 1) 門脇禎二：飛鳥 NHKブックス (1970)
- 2) 武光誠：大和朝廷と天皇家 平凡社新書 (2003)

地形と差別

- 3) 地学団体研究会大阪支部編：大地のおいたち 築地書館（1999）
- 4) 新修大阪市史 歴史地図：新修大阪市史編集委員会 大阪市（1996）
- 5) 浅野浅春、柴山元彦、山際延夫：都市における地域地学教材の開発（第2報）－
上町大地における視覚教材を中心として－大阪教育大学紀要第6部門28、73-83
（1979）
- 6) 浅野浅春、柴山元彦、山際延夫：都市における地域地学教材の開発（第3報）－
地下鉄を利用して－大阪教育大学紀要第6部門30、89-93（1981）